

氏名(本籍)	谷口 榮 (東京都)		
学位の種類	博士(歴史学)		
学位記番号	博歴乙第23号		
学位授与の日付	平成27年3月16日		
学位授与の要件	学位規程第5条第2項該当		
学位論文題目	東京低地の古代・中世の開発と景観 —主に東京低地東部(葛西)を中心に—		
論文審査員	主査 駒澤大学教授	博士(日本史学)	酒井 清治
	副査 駒澤大学教授	文学博士	久保田昌希
	副査 駒澤大学教授	博士(文学)	寺前 直人

## 論文内容の要旨

本論文は、武蔵野台地と下総台地の間に広がる東京低地を舞台として、古代から中世までの人間活動が環境とのかかわりのなかでどのように営まれたかを考察したものである。

東京低地の歴史を調べると、「昔は海だった」とか、「洪水の頻発地域」というイメージが強く、この地域が発展したのは徳川家康の江戸入部によってなされたと理解している。しかし東京低地が海だったのは、東京に人々が暮らしはじめた旧石器時代から現在に至る長い時間の中で、縄文時代前期から弥生時代の中期頃までのことである。河川についても、洪水というマイナス面だけが強調され、歴史的に河川がいかに当該地域の開発や景観と関わっているかを積極的に語ろうとはしなかった。

東京低地の歴史研究を進めるには、そのような先入観を払拭して、当該地域に関わる資料を基に歴史事象を点検していく必要がある。そこで本論では、文献や考古資料だけでなく、まず東京低地の形成の過程を地質学・地理学の成果を確認した上で、考古資料や文献史料など歴史学による調査成果を重ね合わせ、東京低地の環境の変化と人間活動との関わりについて注目し、その諸相について明らかにしたいと考えた。

対象とする時間には、縄文海進後の東京低地の形成によって、そこに営まれる人間活動の始まりから中世までとするが、天正18年(1590)の小田原北条氏滅亡で終わるのではなく、17世紀代の様相を確認した上で本論を終えている。なお、中世以降については、主に東京低地東部の旧葛西地域を対象として論を進めている。

本論は、以下の各章を設けて論を展開している。

序章 東京低地と人間活動の諸相

第一章 東京低地の形成と環境変遷

第二章 東京低地の研究史

### 第三章 低地の開発と古墳の造営

#### 第四章 大嶋郷戸籍と集落

#### 第五章 葛西郡の成立と葛西御厨

#### 第六章 戦国の地域社会と葛西城

#### 第七章 中世の終焉と近世の始まり

#### 終章 新たな東京低地の歴史像を求めて

東京低地は、河川に沿って自然堤防が形成され、旧海岸線沿いには砂州などの微高地が発達している。これらの微高地は縄文海進後に形成されたもので、東京低地で暮らす人々が集落を営む舞台となるところである。序章で本論全体を概観した後、第一章では、寒冷期である旧石器時代から温暖期となる縄文時代への移行に伴い、どのような環境変遷を経て現在に至るのかを述べた。特に、東京低地で確認された波蝕台を手掛かりに、縄文海進と海退後とはどのように環境が変わり、陸化が促されたのかを述べ、「河川集中地帯」「打開きたる曠地」「植生」など環境的特徴を整理した。

第二章では、葛西城や板碑を例に、東京低地の近世以前の歴史研究を進める上でも、近世の地誌類などの文献史料は見落としてはならない情報源であることを紹介した。また、考古学的な研究の取り組みについて、戦前は雑誌『武蔵野』や鳥居龍蔵氏の足跡、戦後は可児弘明氏や中世や近世の考古学研究との関わりについて記している。

第三章から第七章は、時代ごとに東京低地における歴史的テーマを設定して考察を試みた。第三章では、縄文海進後に東京低地で人間活動が活発になるのは、時期的に弥生時代末から古墳時代前期に求められ、その時期に東海系をはじめとする外来系土器の出土が顕著に認められる点に注目した。古墳時代中期や後期になると、東京低地西部・北部・東部で古墳や集落が確認できる場所とできない地域があり、古墳時代だけ見ても東京低地という地域のなかで様相を異にしていることを明らかにした。そして、東京低地の古墳と台地上の古墳との関係について、古墳の石室石材や埴輪などから六世紀における下総台地西南部での新勢力の出現と、東京低地東部への進出とは連動したものであると結論付けた。また、この時代の東京低地での生業活動を示す大型管状土錘から漁労風景を復元し、漁労の盛衰と農業との関係など生業活動の推移についても述べた。さらに、石室石材として用いられる房州石の分布と、古代氏文のひとつ「高橋氏文」に記されている王権と在地勢力の動きとの関連性や、房総における部民の問題についても取り上げ、王権と房総や武蔵方面と本地域との関わりなどについても探った。

第四章では、「養老五年下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」（東大寺正倉院文書）の古代史と考古学による先学の取り組みについて整理したうえで、考古学的な調査成果から甲和・仲村・嶋侯の三里と大嶋郷の範囲を検討し、その範囲は後の「葛西」と呼ばれる東京低地東部、隅田川から江戸川の間求められると結論付けた。そして、考古学的な調査結果から戸籍に記載されている里は、ひとつの微高地に住居が集中して里を形成しているのではなく、微高地上に数軒から数十軒が展開する集落景観を呈し、それら微高地上の集落がいくつか集まって里を構成していたと考えられる。

また、古代東海道が大嶋郷を東西方向に貫いていることにも注目した。古典作品も参考に、承

和2年(835)の太政官符に見える下総国太日河と武蔵・下総両国等堺住田河の両方に設けられた古代東海道筋の渡し場が大嶋郷の東西に存在することを想定し、下総国の大嶋郷は武蔵国と接する玄関口的な位置にあり、陸上とともに水上交通も交えた交通の要衝であったことを述べた。

第五章は、葛西氏と葛西御厨について、主に文献史料から考察した。下総国一宮の香取社遷宮を担当する豊島清元の基盤が葛西郡であること。その地を継承した葛西清重が源頼朝から拝領した丸子庄の問題を掘り下げるとともに、葛西氏の館の所在や、『吾妻鏡』に見える「鷺沼御旅館」「太井の要害」についても考古学的な所見を加味して検討した。また、葛西御厨の郷村については、応永5年(1398)「葛西御厨田数注文写」と永禄2年(1559)「小田原衆所領役帳」の二つの史料から数値情報も含め地図上に復元してみた。葛西御厨の水環境と生活との関わりについても注目し、香取社の河関の位置からも葛西が下総の玄関口的な位置にあること。そしてその河川権益をめぐる香取社と鎌倉府の動きの一端を奥津家定の寄進行為から探った。開発と景観という問題では、先行研究で葛西では戦国期から築堤が行われていたと想定されてきたが、すでに鎌倉時代には葛西氏によって堤が築かれ、景観の特徴ともなっていたことを指摘した。

第六章は、文献史料と考古資料の両面から葛西城と在地社会について考察を試みている。主に文献史料から上杉氏時代と小田原北条氏時代の葛西城をめぐる攻防を整理した上で、発掘調査で明らかになっている堀などの遺構から想定される縄張りの復元を行っている。また葛西城から出土した威信財や小田原から持ち込まれた手づくねかわらけは、近年明らかになった足利義氏の葛西御座と関連する可能性があることを述べた。足利義氏の葛西退去後の小田原北条氏による葛西支配についても、江戸衆による江戸地域の一部として葛西地域が組み込まれて統治されていることに注目するとともに、考古資料からも「小田原化」とも称すべき小田原北条氏との密接な関係がうかがえることを明らかにした。

第七章は、青戸御殿と葛西地域の近世前半の溝や井戸が機能を停止し、埋められる時に遺物が一括廃棄されている事例を紹介した。葛西城跡に構えられた青戸御殿は、新しい時代の到来を告げるのにふさわしい構造物であり、出土した葵の御紋の瓦とスッポンはまさにそれを象徴する資料といえよう。また、青戸御殿での堀への一括廃棄や、他の遺跡において溝や井戸が埋められる事例が、一七世紀中頃に求められることは、単なる偶然とは思われない。土地利用の変化とともに、その土地の生活や景観も変わっていく。葛西地域における時代の変わり目は、それら遺構に廃棄される遺物にも反映しているように思う。特に、中世的なかわらけや内耳土鍋はこの時期に姿を消していくのである。近世都市江戸が拡充されるなかで、葛西地域は次第に中世以来の政治・経済的な地域的特性は失われ、江戸の周縁・近郊地として再整備されていくことになる。

地域の歴史をある時代で切り取るのではなく、重ね合わせ、通して見ることで地域の変わらない歴史的特性が見えてくるはずである。東京低地の場合、地域と地域を結ぶ交流の場であり、また地域を隔てる境界性であろう。この両義的な様相が東京低地の歴史的な特性としてとらえた。そして、この地域が海と関東の内陸とを結ぶ玄関口であることを終章で述べた。

## 論文審査結果の要旨

谷口氏は東京低地が海だったのは、東京に人々が暮らしはじめた旧石器時代から現在に至る長い時間の中で、縄文時代前期から弥生時代の中期頃までのことであるとした。河川についても、洪水というマイナス面だけが強調され、歴史的に河川がいかに当該地域の開発や景観と関わっているかを積極的に語ろうとはしてこなかったという。

東京低地の歴史研究を進めるには、そのような先入観を払拭して、当該地域に関わる資料を基に歴史事象を点検していく必要があると考えた。そこで本論文では、文献や考古資料だけでなく、まず東京低地の形成の状況を地質学・地理学の成果を確認した上で、考古資料や文献史料など歴史学的な調査成果を重ね合わせ、東京低地の環境の変化と人間活動との関わりについて注目し、その諸相について明らかにしたいという。

時間的には、縄文海進後の東京低地の形成過程と、そこに営まれる人間活動から中世までを対象とするが、天正十八年（1590）の小田原北条氏滅亡で終わるのではなく、17世紀代の様相を確認した上で本論を終えている。中世以降については、主に東京低地東部の旧葛西地域を対象として論を進めている。

東京低地は、河川に沿って自然堤防が形成され、旧海岸線沿いには砂州などの微高地が発達している。これらの微高地は縄文海進後に形成されたもので、東京低地で暮らす人々が集落を営む舞台となるところである。序章で本論全体を概観した後、第一章では、寒冷期である旧石器時代から温暖期となる縄文時代への移行に伴い、東京低地が形成される武蔵野台地と下総台地の間が、どのような環境変遷を経て現在に至るのか。特に、東京低地で確認された波蝕台を手掛かりに、縄文海進と海退後とではどのように環境が変わり、陸化が促されたのかを述べ、「河川集中地帯」「打開きたる曠地」「植生」など環境的特徴を整理した。

旧石器時代には、東京低地はまだ形成されておらず、その後温暖化にともない縄文海進が進み、今から約6000年前の縄文時代前期には、東京湾から最も遠いところで約70km奥まで海水が入り込んでいた。葛飾区江戸川河川敷にも地下2mの深さに海蝕台が見られ、海水が及んでいた痕跡を確認できる。前期を過ぎると気温が下がり海岸線の後退が進む。中期には北区中里貝塚のようにカキ主体の貝塚が形成される。中里貝塚は通常の貝塚と異なり、土器や石器などの遺物や、マガキとハマグリ以外の貝・魚類等の出土も少なく、大規模な貝類加工の専用作業によって形成されたハマ貝塚と呼ばれる特徴的な貝塚という。中里貝塚の居住空間は台地上で、東京低地はまだ人が住む環境ではなかったようである。

第二章では、葛西城や板碑を例にあげ、東京低地の近世以前の歴史研究を進める上でも、近世の地誌類である『新編武蔵風土記稿』などは、見落としてはならない情報源であることを紹介した。また、考古学的な研究の取り組みについて、戦前は雑誌『武蔵野』や鳥居龍蔵の足跡、戦後は可児弘明の研究、および中世や近世の考古学研究との関わりについて記している。明治期には遺物・遺跡について考古学的関心が高まるものの、葛西の地域は最近まで海の中であったという認識であったが、大正期

に鳥居龍蔵は、関東大震災の災禍により東京以前の景観が現れたことから、それを期に遺跡を踏査し、東京低地古代遺跡の存在が明らかになっていったようである。また、可児弘明の研究も土錘の出土から、網漁業を推測し東京低地の生業の特徴を指摘している。昭和40年以降は、発掘調査が東京低地でも行われるようになり、考古学資料でも地域史を語れるようになってきたことを紹介した。

第三章から第七章は、時代ごとに東京低地における歴史的テーマを設定して考察を試みている。第三章では、東京低地の縄文海進後の人間活動の痕跡は弥生時代中期だとする。続く弥生時代後期の土器も見られるものの、住居跡が確認されず、人間活動の場として取り込まれるようになったものの、定住にはまだ適さない環境だったとする。人間活動が活発になるのは、弥生時代末から古墳時代前期に求められ、その時期に東海系をはじめとする外来系土器の出土が顕著に認められる点に注目した。口縁部がS字状になるS字状口縁台付甕と、ヒサゴ形壺、パレス壺と呼ばれる伊勢湾に分布をもつ東海系土器や、畿内や北陸系土器が出土する。谷口氏は、S字甕について太平洋沿岸地域を経由する海上ルートと、内陸の長野・群馬県を経由する陸上ルートの二つの搬入ルートがあることから、東海地方を中心とする人々が船を操り太平洋経由で東京低地に到来し、集落を形成して開発を行っていったと想定している。豊島馬場遺跡から膝柄又鍬が出土するが、これは東海系の農具であり、東海地域から先端技術が入って来たとする。

古墳時代中期や後期になると、東京低地西部・北部・東部で古墳や集落が確認できるところ、できない地域があり、古墳時代だけ見ても東京低地という地域のなかで、様相を異にしていることを明らかにした。そして、東京低地の古墳と台地上の古墳との関係について、市川市法皇塚古墳と葛飾区柴又八幡神社古墳の石材が、同じ東京湾南岸地域で産出する房州石であることなど石室石材や埴輪などから、6世紀における下総台地西南部での新勢力の出現と、東京低地東部への進出とは連動したものであると結論付けた。

また、この時代の東京低地での生業活動を示す大型管状土錘から、漁労風景を復元し、漁労の盛衰と農業との関係など生業活動の推移についても述べた。この地域の特色である漁労は、古墳時代前期には筒型土錘が出現するが、80～110g程度であり、後期になると大型管状土錘が出現し約200g前後を量る。ところが奈良時代以降の小型管状土錘は、平均0.5～0.6cmと細くなる。古墳時代後期の大型土錘は刺し網か地引き網、奈良時代以降の小型土錘は投げ網か刺し網に装着したと考えられた。7世紀後半には管状土錘を使う漁法は姿を消し、奈良時代以降小型土錘がわずかに出土するだけで、小規模網漁しか行われなくなったとした。

さらに、「高橋氏文」と石室石材として用いられた房州石の関係を探った。「高橋氏文」は、8世紀後半高橋朝臣氏と阿曇連氏が宮内省膳司長官の座を争った時、高橋氏が職掌の正当性を強調するためにまとめた由来書される。安房での膳司の御贄献上の際、无邪志国造と知々夫国造が膳手として召されている。谷口氏は距離的に遠い北武蔵と安房の関係について検討した。行田市將軍山古墳には房州石が使用されているとしたが、確かに秩父で採れる緑泥片岩が木更津市金鈴塚古墳などに使われ、埼玉県鴻巣市の生出塚埴輪窯跡産の埴輪が、市川市法皇塚古墳や東京湾沿岸の古墳に使われていることから、北武蔵－葛飾－安房のルートは想定できよう。

第四章では、「養老五年（721）下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」（東大寺正倉院文書）の検討を整理した。この戸籍の研究は、大きく分けて①大嶋郷および各里の位置の比定、②古代における家族構成の究明を目指すための研究、③大嶋郷と遺物・遺跡との関係についての研究が行われてきたという。なかでも戸籍については、当時の家族の実態を反映している郷戸実態説と、戸籍上の擬制とみる郷戸擬制説との対立があるとする。谷口氏は、郷戸実態説や郷戸擬制説どちらかに収斂されるべき性格でなく、これまでの研究を踏まえつつ、荒井秀規の見解を引用して、戸籍の編戸による擬制があることを認めながらも、その編戸作業の前提となった家族の実態の考察が求められているとした。

次に、大嶋郷を考えるための考古学の取り組みについて整理した。中でも小林三郎の研究を評価した。小林は、江戸川と荒川に挟まれた南北20kmほどの範囲に、数箇所以上の遺跡を擁して大嶋郷が存在するとした。一般に一つの遺跡が一つの集落だと漠然と考えられていたが、遺跡がいくつか集まって里をつくっていると重要な指摘をした。

考古学的な調査成果を見ると、①葛飾区域では、柴又を中心とする地域、②中川沿いの葛飾区奥戸・立石を中心とする地域の二地域のほか、③江戸川区小岩から南部の海浜部の地域の三つのグループに括ることができるとした。このような地域が甲和・仲村・嶋俣の三里と大嶋郷の範囲である。従来の説では、甲和里は江戸川区小岩、嶋俣里は葛飾区柴又とほぼ定説化しているようで、大嶋郷は江戸川区と葛飾区付近とする説が有力となっている。仲村里については、有力な説はない。谷口氏は、特に奈良・平安時代の遺跡分布を中心に、古代史・自然環境などを総合的に検討した。そして、甲和里は、③の江戸川区小岩から南部地域、嶋俣里は、①の葛飾区柴又地域、仲村里は、②中川沿いの奥戸・立石地域と想定した。大嶋郷については、後の時代の葛西御厨の範囲とほぼ同じ広がりを示すとし、後の「葛西」と呼ばれる東京低地東部、隅田川から江戸川の間求められると結論付けた。そして、考古学的な調査結果から戸籍に記載されている里は、ひとつの微高地に住居が集中して里を形成しているのではなく、微高地上に数軒から数十軒が展開する集落景観を呈し、それらの微高地上の集落がいくつか集まって里を構成していたと考えた。

大嶋郷内には牛馬の骨が多く出土することから、本地域において牛馬が常に供給できる状態で、飼育されていたと考え、官道との関連に注目した。この官道は古代東海道で、大嶋郷を東西方向に貫いていることに注目した。『伊勢物語』や『更級日記』など古典作品も参考に、承和二年（835）の太政官符に見える下総国太日河と、武蔵・下総両国等堺住田河の古代東海道筋の渡し場が、大嶋郷の東西に存在することを想定し、下総国の大嶋郷は武蔵国と接する玄関口的な位置にあり、陸上とともに水上交通も交えた交通の要衝だとした。

大嶋郷推定地から出土した土師器・須恵器についても検討した。7世紀から8世紀前半には、土師器は常総型甕が一部見られるものの、坏・甕は武蔵型が中心で、須恵器は常陸産の坏・蓋、東海系の坏・壺が出土し、量的には東海産、武蔵産よりも常陸産が主体的に供給されているとする。9世紀後半以降武蔵型甕から常総型甕の影響を受けた甕が見られるようになり、須恵器も9世紀前半までは常陸産が多いが、9世紀後半以降には次第に少なくなり、東海産の灰釉陶器が目立つようになるという。このように土器から見ても、他地域の土器が流入し、時期により量の多寡が異なることから、それぞ

れの地域との交流が想定できることを明らかにした。

第五章は、葛西氏と葛西御厨について、主に「香取神宮文書」などから考察した。下総国一宮の香取社遷宮を担当する豊島清元は、治承元年（1177）には遷宮に関われる有力者になっており、基盤が葛西郡であるとした。その地を継承した葛西清重が源頼朝から拝領した丸子庄の問題を掘り下げるとともに、葛西氏の館の所在や、『吾妻鏡』に見える「鷺沼御旅館」「大井の要害」についても考古学的な所見を加味して検討した。葛西氏は、本貫地である葛西に館を持っていたとして、葛飾区立石の熊野神社付近を有力候補と想定した。その理由は、立石遺跡の存在で、平安時代末から鎌倉時代を中心とした遺構・遺物がまとまって出土することだとする。たとえば鎌倉から持ち込まれた手づくねカワラケ、船載白磁蓮弁碗、常滑焼壺などが出土すること、中川右岸に立地し、遺跡内を古東海道が通る交通の要衝に位置することなどからである。

葛西氏は、河川とともに渡河地点の陸上交通をも監視し、武蔵国の東西の玄関口を押さえる役割を行っていたとした。また、葛西御厨の郷村については、応永五年（1398）「葛西御厨田数注文写」と、永禄二年（1559）「小田原衆所領役帳」の二つの史料から、数値情報も含め地図上に復元している。あわせて地名にも注目して、転訛と地名の持つ意味から郷村の風景を探っている。

葛西御厨の水環境と生活との関わりについても注目し、香取社の河関の設けられかたからも、葛西が下総の玄関口的な位置にあることがうかがえること。その河川権益をめぐる香取社と鎌倉府の動きの一端を、奥津家定の寄進行為から探っている。開発と景観という問題では、低地での開発は堤をめぐらせることが基本的な手法であり、先行研究から葛西では戦国期から築堤が行われていたとする。しかし、新史料の発見から、葛西氏一族は築堤や修固などの土木技術を持っており、太田荘と下河辺荘で工事に関わっていることから、葛西氏によって鎌倉時代には築堤され、景観の特徴ともなっていたことを論じている。

第六章は、文献史料と考古資料の両面から、葛西城と在地社会について考察を試みている。主に文献史料から、上杉氏時代と小田原後北条氏時代の葛西城をめぐる攻防を整理した上で、発掘調査で明らかになっている、堀などの遺構から想定される縄張りの復元を行っている。また、葛西城から出土した威信財や、小田原から持ち込まれた手づくねかわらけは、近年明らかになった足利義氏の葛西御座と関連する可能性があることを述べている。足利義氏の葛西退去後の小田原北条氏の葛西支配についても、江戸衆による江戸地域の一部として、葛西地域が組み込まれて統治されていることに注目するとともに、考古資料からも「小田原化」とも称すべき小田原北条氏との密接な関係がうかがえるとしている。

葛西地域の著名な中世遺跡は、葛西城跡である。昭和46年から56年にかけて発掘調査が断続的に行われ、東京都内における中世考古学の先駆けとなった。発掘調査により、規模の小さな砦的な施設と見られていたが、小田原後北条氏時代の大規模な堀や、堀が巡る郭内に井戸や土坑、溝、建物の柱跡、柵列などが見つかった。谷口氏は、天文7年から天正18年までの52年間の、小田原後北条氏時代の葛西城について、文献から見ると天文7年から永禄2年（1559）までのおよそ20年あまりの葛西城の史料はなく、様相が不明で空白期だとする。しかし、発掘調査により、15世紀後半から16世紀代の遺物

や遺構が確認されている。葛西城は、14世紀後半から15世紀前半までを前期上杉氏時代、葛西城築城後の15世紀後半から、後北条氏が葛西城を奪取する、天文7年の16世紀前半までを、後期上杉氏時代と呼び分ける。前期上杉氏時代の陶磁器は出土するものの遺構は不明確である。後期上杉氏時代の遺構は、幅4～8mの堀が後の本丸の堀に切られていることから、本丸付近に中核部が構築されていたとする。小田原後北条氏の本丸の堀は幅約20mを測り、天文7年に入部したのち大規模な縄張りの変更をし、戦国の城としての構えを整えたとした。

四代古河公方足利晴氏、五代の足利義氏は、葛西城を御座所としていた時期があるという。義氏は「葛西様」とも尊称され、永禄元年（1558）まで在城していたようである。葛西城では、天文7年以降から永禄の初め頃までに、小田原後北条氏時代の本丸を区画する堀が掘られる大改修が行われた可能性があり、その頃古河公方足利晴氏・義氏が御座していた時期にあたり、御座所としての体裁を整える普請と考えている。発掘調査において、本丸だけでも47基の井戸が見つかり、石組みの井戸からは小田原系のかかわりがまとまって出土し、饗宴が行われたとする。かわらけは天文末期から永禄初期で、足利義氏が御座していた時期に重なる。また、土坑の中から中国元代の青花器台が出土し、優品であることから威信材と想定し、義氏の御座と時期的に合致ことも義氏の御座所としての傍証の一つとなる。

第七章は、青戸御殿と葛西地域の近世前半の溝や井戸が機能を停止し、埋められる時に遺物が一括廃棄されている事例を紹介した。葛西城跡に構えられた青戸御殿は、新しい時代の到来を告げるのにふさわしい構造物であり、出土した葵の御紋の瓦とスッポンはそれを象徴する資料という。また、青戸御殿での堀への一括廃棄や、他の遺跡において溝や井戸が埋められる事例が、17世紀中頃に求められることは、単なる偶然とは思われないとした。土地利用の変化とともに、その土地の生活や景観も変わっていく。葛西地域における時代の変わり目は、それら遺構に廃棄される遺物にも反映していると考えた。特に、中世的なかかわりや内耳土鍋が、この時期に姿を消していくことからいえるとした。近世都市江戸が拡充されるなかで、葛西地域は次第に中世以来の政治・経済的な地域的特性は失われ、江戸の周縁・近郊地として再整備されていくことになるという。

東京低地は河川集中地帯で河川景観に特徴があり、古代においては自然堤防などの微高地に居住して畠や後背湿地の水田が広がる景観であったが、近世には『江戸名所図絵』に紹介されるように、「延気」の場、行楽地として整えられていった土地だとする。

地域の歴史をある時代で切り取るのではなく、重ね合わせ、通して見ることで地域の変わらない歴史的特性が見えてくるはずであるとした。東京低地の場合、地域と地域を結ぶ交流の場であり、また地域を隔てる境界性である。この両義的な様相が東京低地の歴史的な特性としてとらえた。そして、この地域が海と関東の内陸とを結ぶ玄関口であることを終章で述べている。

谷口氏の論文は、葛西という地域の変遷を、考古学・文献・地理・地誌などの手法を使用して、地域史を復元しようとした研究で、各研究分野を横断した研究で独創的な論文である。審査員一同博士（歴史学）の学位を授与するに値するとの結論に至った。